

初芝富田林中学校・高等学校

大阪府下に確固とした地位を占める進学校の復活
校長が率先垂範で進める学校改革



大阪南部の豊かな自然に囲まれた地に建つ初芝富田林中学校・高等学校。2018年4月、学校改革で定評のある平井正朗氏が校長に就任した。着任以来、データを徹底的に分析し、課題を抽出、中学入試、高校入試、カリキュラムの変更、校塾連携の強化と次々に教育改革施策を打ち出した。2学期を迎えた現在、「大阪府下に確固とした地位を占める進学校の復活」を目指し、生徒一人ひとりに向き合う教育を推し進めている。ハイスピードで進化する初芝富田林について平井校長にインタビューした。

中学入試は大幅変更
進路満足度「第一志望決定率」
100%を目指す

平井校長が進める学校改革では、来年度の中学入試も大きく変更となる。これまで3日間実施してきた試験日は、1月19日（土）、20日（日）の2日間のみとなる。前期A（午前）では、小論文と面接のみのフロンティア入試を導入した。小学5、6年の成績、模試結果、同校が10月20日（土）に実施するプレテストでの成績等が選考の対象になり、英検4級以上の保持者は「英語重視型」として優遇される。前期B（午前）は4科目（国・算・理・社）、3科目（国・算・理）の入試だ。前期C（午後）では2科目（国・算）の実施となる。

2日目は後期Aで従来の「リテラ入試」を「適性検査型入試」にリニューアルし、国・算・理＋社融合で実施。また後期Bとして午後に2科目（国・算）で実施する。

「募集定員は120名、出題レベルは、小学校での学習内容を中心とした基本問題が中心です。約6割取れる生徒であれば、入学してから育てます」と平井校長。

また、高校入試は2月9日（土）に実施。英語にリスニングを導入するのが変更点。試験科目は5科目（国・数・英・理・社）で面接は実施しない。中学では入学時点では学習到達度に合わせた「Ⅲ類」「Ⅱ類」「Ⅰ類」の3コースだが、中学3年時から生徒の到達度と目標に合わせて「Wild-Frontierコース」と「未来創造コース」に再編される。

「Wild-Frontier コース」は、大阪府



文化祭での合唱にいきいきと取り組む生徒たち

立大学・市立大学以上をターゲットとし、上位は東大・京大をねらいます。将来は、近々、統合予定の大阪府立と市立に50名以上は合格させる指導体制を構築したいと考えております。また『未来創造コース』は上位が大阪府立・市立大学をねらい、コース全体としては中堅国立や有名私立を目標にしていきたいと思います。教員スタッフには従来の面倒見の良さを発揮していただき、進路指導とキャリア教育を徹底、生徒個々のポテンシャルを最大限に引き出した上で、進路満足度100%を達成できるように指導を貫徹してほしいと願っています」と平井校長は語る。

ユラム・マネジメントが必要なのです」と説明した。

授業の効率化と働き方改革 校塾連携で学力向上を目指す

学園本部の振り返り、データ分析、学習塾へのヒアリングから「教師は定着度ではなく、量の消化度合いで先に進む傾向がある。生徒は量処理することに追われ、定着度が低くなり、大学合格実績が大きく落ち込んでいる。それが市場評価につながり、中学の定員割に至っている」等の現状を把握した上で、学習指導要領の改編や「働き方改革」も考慮し、カリキュラムの大幅改訂を実施。「主役である生徒を伸ばすことだけ考えています。現状で言えば、メリハリが不可欠。次年度から従来までの7時限授業を、月曜・金曜はすべて6時限、土曜は4時限にと変更します」と平井校長。

「1〜6限は本校の教員が基礎・基本の指導を徹底します。当然、積み残しがある生徒には、放課後、個別指導で定着を図ります。発展的学習を望む生徒には、合格答案作成に向けて、外部講師による校内予備校を設定します。無論、塾・予備校へ行ってもよいというオプションです。教師の授業時



カリキュラムの大幅改訂に取り組んでいる平井正朗校長



自主学習支援システムのICT化の一つ、オンライン授業



夏期勉強合宿の様子

間を減らすことで、教員は授業研究などの自己研鑽の時間を確保できるようにし、担任はクラスの生徒一人ひとりと対峙できるはずです。また、アウトソーシングした外部教員と連携することによって、OJTも可能になります。教員一人ひとりの指導力が高まれば、授業力すなわち質も向上します。『働き方改革』にも対応させているのです」とその理由を語る。

校内予備校は、7〜8限を使って中3〜高3まで実施。教科は英数が基本であるが、高2は国語、高3は国語、理科（化学・物理）も加味されること。中1〜2は、現在、取り組んでいる本校教師による自主講座を継続。結果的には、7時限授業より多い授業時間を勉強したことになるという。

一方、平常授業内容も「従来の徹底した進路指導に加えて、対話や議論を通じて多様な考え方を理解、協働しながら課題解決にあたる探求活動（中2〜高1）、異文化理解に向けたグローバル国際教育（中3・ロサンゼルス研修「修学旅行」、高1・オックスフォード短期留学、自主学習支援システムのICT化（中2〜3・オンライン英

校長自ら教壇に立った勉強合宿

今年の夏期勉強合宿で、平井校長は4学年の教壇に立った。奈良パークホテルでの高1、神戸ホテルフルーツフラワーでの高2、大津アヤハレックサイドホテルでの中2、そして御所西京都平安ホテルでの中3のそれぞれ英語の授業だ。

「勉強合宿で授業をした目的は2つあります。1つは率先垂範で学校改革に取り組む。2つ目は、授業の質の検証です。生徒の生の声や実態を自分の目で確かめておくことが大切なのです。校長室に座っているだけでは、教頭や学年主任といったミドルリーダーの声を聴くだけで、現状を粒さに観察できませんから。」

「垂範」の言葉通り、平井校長は朝、学校のロタリーに立つ。スクールバスで登校してくる生徒を迎えるためだ。さらに校長室のドアは、常に開放されており、生徒がいつでも校長と話せるようになっている。頻繁に授業を見回り、職員室では教員の意見に耳を傾ける。休日以外、更新するという校長ブログも圧巻だ。カリキュラム・マネジ

メント、英語教育、トレンド情報等、話題はバラエティに富んでいる。

「日本の大学入試を振り返ると、1つの正解を求める1点刻みの入試を突破し、序列化された学校へ進学することが主流でした。しかし、科学技術やグローバル化の進展によって、社会が求める人物像は変容し、学習指導要領の改訂や大学入試改革が進んでいます。大学入試の設問傾向においても知識だけに偏らず、自ら問いを立て、学び続けることが思考力・表現力につながり、やがて人生の岐路に立ったとき、世界を新しい目線で見え解決に向けて行動する判断力につながるという方向性が読み取れます。中高時代は、自ら問いを立て、学び続け、自己を見つめ直すことができる絶好の機会なのです。自分は何のために生きるのか、という問いに正面から向き合い、将来の夢を育むしなやかさを養うのは大人の役割です」（同校HP参照）と語る校長のまなざしは、まっすぐ生徒に向けていた。

DATA

- 校 長 所 平井 正朗
- 住 宅 〒584-0058
- 電 話 大阪府富田林市彼方1801
- 交 通 0721-34-1010
- 7方面からスクールバス運行
- 近鉄長野線 滝谷浮動駅から約5分
- 近鉄長野線・南海高野線 河内長野駅から約15分
- 南海高野線 金剛駅から約25分
- 泉北高速鉄道 泉ヶ丘駅から約25分
- 泉北高速鉄道 和泉中央駅から約40分
- 和泉市立病院前から約50分
- 岸和田市立城東小学校前から約50分
- 生徒数 291名(中学校)
- 975名(高等学校)
- URL http://www.hatsushiba.ed.jp/tondabayashi/